



イクイノックス

ドウデュース

小川隆行
ウマフリ

アイドルホース列伝 超

1949-2024

愛さずに いられない!

現役世代から
昭和のレジェンドまで
過去から未来へと語り継がれる
名馬たちの蹄跡をここに。

全156頭

ナリタトップロード

ヒシミラクル

ダンツフレーム

ドウデュース

リバティアイランド

デュープボンズ

アイドルホース列伝 超

1949-2024

小川隆行＋ウマフリ

星海社

310



はじめに

人間は性格をはじめとして、一人一人が異なるため「十人十色」と言われるが、同じように気性が異なる競走馬も「十馬十色」である。

ゴールドシップのように相手を威圧する馬もいれば、勝てなくても懸命に走り続けたハルウララのようなタイプも存在する。気性以外にも、例えば逃げて能力を発揮する馬もいれば追い込みでこそ輝く脚を魅せる馬も。鞍上の指示に素直に従う馬もいれば抗う馬もいるなど、馬の特質や個性が異なるのも競走馬、そして競馬の魅力である。

競馬ファンの多くは、競馬を始めた直後に魅力のある馬に出会い、その馬がきっかけで競馬の魅力を知り、競技としてのおもしろさに触れて競馬が好きになる。

個人的な話で恐縮だが、筆者にも競馬の魅力を教えてくれた馬がいた。オグリキャップと同年代に好走したホワイトストーンである。

同馬は日本ダービー3着からセントライト記念を勝ち、菊花賞を2着。「必ずいつかGⅠを勝つ」と信じた筆者は、GⅠ出走のたびに単勝を買い続けた、オグリキャップの有馬記念で

3着後、産経大阪杯（当時GⅡ）を勝つも、その後11戦重賞に出走して2着が最高成績。当時競馬雑誌を編集していたこともあり、管理する高松邦男師や主戦の柴田政人騎手、田面木博公騎手に話をうかがい応援し続けたがなかなか勝てない。「もう終わったかもしれない」と思いつつ、明け7歳（当時の馬齢）のアメリカジョッキークラブCでパドックと返し馬を目にする、いつもと様相が違った。

馬から、それまででない闘志を感じた。メジロマックイーンやオグリキャップら名馬と好走をしていた当時の迫力を感じ、単勝を購入すると、それまでハナなど切ったことのない差し馬がスタートから先手を奪い、そのまま逃げ切り勝ち。先頭でゴールした瞬間から涙が止まらなくなった。

2年あまり同馬を追いかけてきた筆者にとって、久しぶりの勝利を見詰めた直後の感動は、今も脳裏に刻まれている。大好きな競馬を仕事にしてよかった、と心から感じた。

逆に、憎き馬となったのが冒頭で取り上げたゴールドシップだ。2012年2月12日。この日筆者はWIN5を8点ほど購入すると、WIN4まで指名馬が勝ちリーチがかかった。WIN5の共同通信杯で持っていたのはディープリランテ1頭。単勝1・4倍の圧倒的1番人気であり、負けるはずがない……と感じた数分後、筆者はウインズで立ち上がれなくなった。ゴール寸前でゴールドシップに交わされ僅差2着。的中していたら100万円であり、仮に

800円追加していれば160万円…。競馬雑誌で取材中だった漫画家の蛭子能収さんに「惜しかったねえ」と言われたのを今でも覚えている。その夜は泥酔してしまった。

このように、誰にでも印象深い馬がいるものだ。数多くのアイドルホースの個性やレース内容を筆頭に、あらゆる角度から記したのが本書である。前書ではGI馬を中心に101頭ほどの馬を取り上げたが、今回は年代ごとのGI馬、そしてGIには手が届かなかった個性的な馬を156頭ほど記させてもらった。

本書を読みながら名馬を思い出してもらえれば、これ以上嬉しいことはない。

小川隆行

※ゴールドシップ、ホワイトストーン、メジロマックインンについては

前作『アイドルホース列伝』（星海社新書）をぜひお読みください。

目次

はじめに 3

馬名索引（五十音順） 20

第1章 その走りが伝説になる 2020年代 25

パンサラッサ 比類なき大逃走、二刀流の国際GI馬 26

イクイノックス 三冠牝馬すら寄せ付けない衝撃の歴代最強馬 30

ドウデュース 夢に照らされる、競馬の「主人公」 36

ミックファイア 期待を背にひた走る、22年ぶりの南関三冠馬 40

リバティアイランド 一体どれほど強いのか、完全無欠の三冠牝馬 44

コラム クセの強い奴ほど愛される 48

ウシユバテソーロ ダート転向からわずか1年、世界の頂点に 50

デーブポンド 何度でも、ひたむきに、全力で 52

タイトルホルダー 気持ち良い逃げで競馬界を牽引した阪神巧者 54

エフフォーリア 横山武史騎手を成長させた、無敗の皐月賞馬 56

メイケイエール みんなから愛された、負けず嫌いの優等生 58

フォーエバーヤング 世界のダート界を担うスター候補 60

ダノンデサイル 皐月賞回避を布石とした大逆転のダービー馬 62

コラム ドラマを演出する道悪巧者の個性派たち 64

レイパパレ 無傷6連勝で牡馬三冠馬を撃破した快速女王 66

イグナイター 世界へと飛び立った、兵庫の「点火装置」 67

ヨカヨカ 1%から生まれた灼熱のスプリンター 68

アカイトリノムスメ 母から受け継いだ名前と素質でGI制覇 69

ドンフランキー 世界をも驚かせた、記録的「巨漢馬」 70

ナミュール 一つの出会いに導かれた天才少女 71

ブローザホーン 雨の京都、宝塚記念を差し切った万能型小兵 72

ソールオリエンズ 世代レベルを問う声を蹴散らした皐月賞馬 73

スキルヴィング ゴールまで耐え抜き絶命した悲運の青葉賞馬 74

タステイエーラ 15年クラシックを思い出させる血統の神秘 75

ドウレッツア 大外から菊を掴んだ、遅れてきたエリート 76

レーベンスティール 帝王の血を受け継いだ、光り輝く未完の大器 77

ジャステインミラノ 「康太！」の声を後押しに加速した皐月賞馬 78

第2章 忘れたくないあのときの夢 2010年代 79

ヴィクトワールピサ 勇気を与える胴白、青縦縞、袖赤、青一本輪 80

キズナ 逆境に打ち勝つ希望の末脚 84

モーリス 落札価格は約160万円、砂漠で見つけた宝石 88

ドウラメンテ "duramente" に走りぬけた、早逝の二冠馬 92

メロディーレーン 小さな体に満つ、父母のくれたスタミナ 98

ウインバリアシオン 怪我と闘い続けた不屈のシルバークレクター 102

ロードカナロア 世界を置き去りにする、不屈の王 104

ジャスタウエイ 二代より先へ続く、人の夢 106

ホッコータルマエ 苦小牧の魅力を発信するダートの超一流馬 108

ヴィルシーナ 強敵同期の連続2着：難題乗り越え掴んだ栄冠 110

エピファネイア クラシックで連続2着から菊制覇の名種牡馬 112

メイショウマンボ 一人の騎手を救った、人の情で繋がれた名牝 114

ハープスター 観衆の視線を最後方に集めた天才少女の末脚 116

サウンズオブアース 戦績以上にファンを魅了した、最強の2勝馬 118

サトノクラウン 海を渡り、戴冠した古豪の血 120

レッツゴードンキ 可愛く力強く丈夫、多彩な魅力のマイル女王 122

マカヒキ 夢の「七強対決」を制した日本ダービー馬 124

ヴィブロス 名門一族のプライド、もう一度世界へ 126

スワーヴリチャード 父と似る運命を歩んだ、遅咲きの大器 128

レイデオロ 幸せな馬をつくりつづけた伯楽への贈り物 130

キセキ ハイレベルな時代で踏ん張り抜いた菊花賞馬 132

クロノジェネシス 夢を与える、グランプリの申し子 134

ラヴズオンリーユー 海外G I 3勝のグローバルクイーン 136

コラム 現行レースはわずかに四つ レース名に刻まれた名馬たち 138

ビートブラック 語り草の天皇賞・春、大物食いの逃げ馬 140

ラブミーチャン ハマちゃんと一緒に中央挑戦、母の血を高めた孝行娘 141

ペルーサ 「やればできる」を証明した名門厩舎の問題児 142

レッドデイヴィス タラレバを言いたくなる史上最強セン馬 143

ストレイトガール 衰えを知らない、唯一無二の7歳女王 144

シゲルスダチ たとえ故障しても転倒しない心優しきヒーロー 145

フェノーメノ ともに「挑戦者」として天皇賞・春を連覇 146

- ロゴタイプ 大舞台で圧倒的人気馬を倒した、最強の刺客 147
 コパノリツキー 日本ダート史上最大の下剋上を果たした名馬 148
 マリアライト 二冠馬すら撃ち抜く、狙いすました末脚 149
 イスラボニータ 猫科的走法を持つ親孝行なクラシックホース 150
 シュヴァルグラン 勝利の女神を微笑ませた諦め知らずの挑戦者 151
 ラニ 現在へと繋がる米国遠征をした「ゴジラ」 152
 ブレイブスマッシュ 皇帝・帝王の血を海外で示した異色の英雄 153
 デイアドラ 過かな旅路を走りぬいた、偉大なる女傑 154
 ラッキーライラック 不屈であり続けた、もう1頭の天才牝馬 155
 アフリカンゴールド 再上昇により掴み取った、アイドルの未来 156
 マイネルファンロン ファンに愛される「マイネル」の誇る良血馬 157
 マルシユロレーヌ 砂の激流を泳いだ、世界の名牝 158

クロフネ 日本競馬の眠りをさました白い「黒船」 160

ヒシミラクル 駆けだしたら決して止まらない穴馬ステイヤー 164

ネオユニヴァース 熱いハートとクレバーな頭脳、魅惑の二冠馬 170

ステイルインラブ 勝負強さと反骨心で手にした17年ぶりの偉業 174

ドリームジャーニー 父の血を感じる、愛すべき不器用なアイドル 178

コラム 前評判を覆した不屈の「代替種牡馬」たち 182

タップダンスシチー 遅れてきた2000年世代の代表馬 184

ダンツフレーム シルバーコレクターを脱した宝塚記念馬 186

タニノギムレット 他馬と異なる歩みで、たどり着いた頂点 188

ノーリーズン 皐月晴れに瞬いた、幸運の彗星 190

ゴールドアリュール 大種牡馬の「後継馬」筆頭と言えるダートの雄 192

アドマイヤジャパン CMにも出演、無敗の三冠に抵抗した良血馬
メイショウサムソン 成長は止まらない、第一線を走り続けた名馬
マツリダゴッホ 名伯楽の転換点、叩き上げの有馬記念勝ち馬
マイネルキッツ 穏やかな余生を送る、人気薄を覆したGI馬
スクリーンヒーロー 好機を掴み続けた銀幕のシンデレラボーイ
サクセスブロッケン 二度、東京優駿の舞台に立った異例の人気者

194
196
198
200
202
204

コラム 隔世の感あり！ 昔の馬券と予想法はこんなにシンプル

206

ラガーレグルス 人の手で道を断たれた、不遇の馬

208

カルストンライトオ 今なお破られぬ記録、新潟に愛された韋駄天

209

ビリーヴ ファンを魅了した完全無欠のスプリント女王

210

イングリッドデーレー 一世一代の逃走劇で7馬身差完勝の天皇賞馬

211

デュランダル 今も語り継がれる、「聖剣」の英雄的な末脚

212

ポップロック 日豪で活躍した、長く良い脚を使う名脇役

213

カンパニー 本当のフィナーレは、まだ見ぬ未来へ

214

- デアリングハート ダートの素質も示した、無敗三冠牝馬の祖母
ラインクラフト 周囲に愛された、薄幸のマイル最強牝馬 216
- トウカイトリック 2頭の三冠馬を知る実力派の名物「爺さん」 217
- カネヒキリ 屈腱炎を乗り越え、G1タイトルを手にした「不死鳥」 218
- エアメサイア 夢を叶えた名手の「恋人」 219
- テイエムプリキュア 魔法が解けたシンデレラが紡いだ物語 220
- フリオーソ GI級6勝、言わずと知れた地方最強馬 221
- アストンマーチャン 軽やかに駆け抜けた、天逝が惜しまれる快速娘
クイーンズプマンテ 勝利の美酒に酔いしれる世紀の逃走劇 222
- ヒカルアヤノヒメ 老いし姫と家族、317の蹄跡 224
- トランセンド 震災後の日本競馬界を勇気づけたダート王者 225
- ワンダーアキュート 馬から人へ、人から馬へ。導きあった人馬 226

- ダイイチルビー 1頭に焦がれた、輝けるお嬢様 228
 ヤマニンゼファア 良い意味で期待を裏切り続けた不屈の挑戦者 232
 サクラローレル 度重なる故障を乗り越え掴んだ年度代表馬 236
 メイセイオペラ 史上唯一、中央GIを制した岩手の伝説的王者 240
 ナリタトップロード 強豪相手に惜敗続きも人に愛された実力派 244
 トウケイニセイ 陸奥より遙かなる世界を脱む 250
 レオダーバン レジエンドの信念とともに開花した菊花賞馬 252
 ベガ 彗星と出会い輝いた、美しき二冠牝馬 254
 ノースフライト 牡馬混合戦の先駆者、マイル戦の美しき女帝 256
 アブクマポロ 中央も震え上がった、南関の哲学者 258
 ライデンリーダー 交流元年、笠松からきた衝撃の実力派牝馬 260
 ブロードアピール 時代を超えても色褪せない、衝撃の末脚 262
 フラワーパーク 自分の庭では三冠馬も寄せ付けぬ短距離女王 264
 ダンスインザダーク 最悪の展開を耐えて手にした菊の大輪 266
 バブルガムフェロー 秋の天皇賞に愛されたサンデー第2世代筆頭 268

- フサイチコンコルド 3カ月ぶりの実戦でダービーを制した秘密兵器
 ケイエスマイラクル 米国から来た、悲運の天才スプリンター 272
 サンエイサンキュー 使われ続け有馬記念で散った、悲運の名牝
 マイシンザン 強靱な末脚と誇りを引き継いだ不屈の戦士 274
 ロイスアンドロイス 「2着」の美学を見出したエンターティナー
 サムソンビッグ 三冠皆勤賞、人気・魅力は一流の重賞1勝馬 276
 ホツカイルソー 愛すべき名脇役が手にした復活の金メダル 277
 キョウエイマーチ 強敵メジロドーベルを突き離れた桜花賞馬 278
 メジロブライト 強力世代に囲まれながら4連勝した天皇賞馬 279
 ツルマルツヨシ 皇帝ルドルフの失われし傑作 280
 サウスヴィグラス 生涯ダート界を牽引し続けたスピードスター 281
 トロットスター 短距離戦国時代、彗星の如く現れた新王者 282
 スーパーペガサス ばんえい競馬界の絶対的・伝説的ヒーロー 283

コラム 驚くべき上がり馬たち 彗星のように現れ、一瞬で勢力図を塗り替える

トキノミノル 「幻の馬」の記録が伝える凄み 288

シンザン 類稀なる生命力を示した、伝説の三冠馬 289

カブトシロー 69戦を走り抜いた古武士は小柄な万能タイプ 290

スピードシンボリ 未踏の地を求め続けた偉大なチャレンジャー 291

タケシバオー 国内で一度も3着を外さなかった条件不問の怪物馬 292

アローエクスプレス 内国産種牡馬の不遇時代、孤軍奮闘した巨星 293

グランドマーチス いまや伝説の物語、障害馬として初の顕彰馬 294

タケホープ ダービー&菊花賞でヒーローを破った二冠馬 295

キタノカチドキ 単枠指定第一号として名を残すセンスの塊 296

カブラヤオー 絶対に譲らず二冠を制した、極端な怖がり屋 297

テスコガビー 美しく瞬いた、一代限りの伝説 298

トウシヨウボーイ T T G時代を築き、三冠馬の父となった天馬 299

グリーングラス 三強の牙城を守り抜いた孤高のステイヤー 300

- カツラノハイセイコ ハイセイコー最高傑作、繊細さと強さは表裏一体
 ハギノトップレディ 幻の桜花賞馬から誕生した、親孝行アイドル 302
 カツラギエース 三冠馬も海外馬も、情念すらも振り切って 303
 ミホシンザン 偉大な父の血を色濃く受け継いだ、幻の三冠馬 304
 メジロラモーン 今も輝くその血統、パーフェクトな三冠牝馬 305
 マテイリアル 低迷、復活、早逝…語り継がれる重賞2勝馬 306
 サクラスターオー 名実況とともに駆けた、悲運の二冠馬 307
 メリーナイス 6馬身差の圧勝劇で魅せた伏兵ダービー馬 308
 マックスビューティ 優雅さと美しさを兼ね備えた絶対的アイドル 309
 ダイユウサク 晩年に咲いた、元祖・大波乱の立役者 310
 サッカーボーイ 日本一の勝負服に見合うベストパフォーマンス 311
 ロジータ 強い精神力を誇った川崎のレジエンド牝馬 312
 サンドピアリス 三度目の波乱を望まれた砂の貴婦人 313

執筆者紹介
(五十音順)

316

写真

フォトチェスナット

ア行

アカイトリノムスメ 69
 アストンマーチャン 222
 アドマイヤジャパン 194
 アブクマポーロ 258
 アフリカンゴールド 156
 アローエクスプレス 293
 イクイノックス 30
 イグナイター 67

イスラボニータ 150
 イングランディール 211
 ヴィクトワールピサ 80
 ヴィブロス 126
 ヴィルシーナ 110
 ウインバリアシオン 102
 ウシュバテソーロ 50
 エアメサイア 219
 エピファネイア 112
 エフフォーリア 56

カ行

カツラギエース 303
 カツラノハイセイコ 301
 カネヒキリ 218
 カブトシロー 290
 カブラヤオー 297
 カルストンライトオ 209
 カンパニー 214
 キズナ 84

キセキ 132

キタノカチドキ 296

キョウエイマーチ 278

クイーンズプマンテ 223

グランドマーチス 294

グリーンガラス 300

クロノジエネシス 134

クロフネ 160

ケイエスマラクル 272

コパノリツキー 148

ゴールドアリュール 192

サ行

サウスヴィグラス 281

サウンズオブアース 118

サクセスブロッケン 204

サクラスターオー 307

サクラローレル 236

サツカーボーイ 311

サトノクラウン 120

サムソンビッグ 276

サンエイサンキュー 273

サンドピアリス 313

シゲルスダチ 145

ジャスタウエイ 106

ジャスティンミラノ 78

シュヴァルグラン 151

シンザン 289

スキルヴィング 74

スクリーンヒーロー 202

ステイルインラブ 174

ストレイトガール 144

スピードシンボリ 291

スワーヴリチャード 128

スーパーペガサス 283

ソールオリエンズ 73

タ行

ダイイチルビー 228

タイトルホルダー 54

ダイユウサク 310

タケシバオー 292

タケホープ 295
タステイエーラ 75
タツプダンスシチー 184
タニノギムレット 188
ダノンデサイル 62
ダンスインザダーク 266
ダンツフレーム 186
ツルマルツヨシ 280
デアリングハート 215
デアアドラ 154
デーブボンド 52
テイエムプリキュア 220
テスコガビー 298
デュランダル 212

トウカイトリック 217
トウケイニセイ 250
トウシヨウボーイ 299
ドウデュース 36
ドウラメンテ 92
ドウレッツア 76
トキノミノル 288
トランセンド 225
ドリームジャーニー 178
トロットスター 282
ドンフランキー 70
ナミュール 71

ナ行

ナリタトップロード 244
ネオユニヴァース 170
ノースフライト 256
ノーリーズン 190
ハギノトップレディ 302
バブルガムフェロー 268
パンサラッサ 26
ハープスター 116
ヒカルアヤノヒメ 224
ヒシミラクル 164
ビリーヴ 210

ハ行

ビートブラック 140
フェノーメノ 146
フォーエバーヤング 60
フサイチコンコルド 270
フラワーパーク 264
フリオーツ 221
ブレイブスマッシュ 153
ブローザホーン 72
ブロードアピール 262
ベガ 254
ペルーサ 142
ホツカイルソー 277
ホッコータルマエ 108
ポップロック 213

マ行
マイシンザン 274
マイネルキッツ 200
マイネルファンロン 157
マカヒキ 124
マックスビューティ 309
マツリダゴツホ 198
マティリアル 306
マリアライト 149
マルシユロレーヌ 158
ミックファイア 40
ミホシンザン 304
メイケイエール 58

メイショウサムソン 196
メイショウマンボ 114
メイセイオペラ 240
メジロブライト 279
メジロラモーヌ 305
メリーナイス 308
メロディーレオン 98
モーリス 88
ヤ・ラ・ワ行
ヤニンゼファー 232
ヨカヨカ 68
ライデンリーダー 260
ラインクラフト 216

ラヴズオンリーユー 136
ラガーレグルス 208
ラッキーライラック 155
ラニ 152
ラブミーチャン 141
リバティアイランド 44

レイデオロ 130
レイパレ 66
レオダーバン 252
レッツゴードンキ 122
レッドデイヴィス 143
レーベンスティール 77

ロイスアンドロイス 275
ロゴタイプ 147
ロジータ 312
ロードカナロア 104
ワンダーアキュート 226

第1章 その走りが伝説になる
2020年代

2020

パンサラッサ

比類なき大逃走、二刀流の国際GI馬

鹿毛

2017年生まれ

「記録よりも記憶に残る」—— いったい誰が最初に紡いだ言葉なのだろう。パンサラッサは、この言葉がひたすら似合う競走馬だった。

パンサラッサの「記録」は説明するまでもない。GI福島の勝利を皮切りに、GII中山記念も制覇——さらには、初のGI制覇を成し遂げたドバイターフ（ロードノースと同着）。そして、日本馬史上はじめて勝利を手にした世界最高賞金レースのサウジC勝利へと繋がっていく。パンサラッサは、芝とダート両方の海外GIレースを制した初の日本調教馬である。この記録を再び作る競走馬は今後、そう簡単には出てこないであろう。

しかしながら、人々の脳裏に焼きついているパンサラッサの「記憶」といえば、おそらく、2022年の天皇賞・秋での走りではないだろうか。あの日、パンサラッサは自身の世界を作った。それほどに、勇敢な大逃走だった。

「府中の2000mは簡単ではない」レース前に矢作芳人調教師も話していたように、天皇賞・秋を逃げ切って勝利したのは1987年のニッポータイオーまで遡る。それ故か——それとも他の出走馬も豪華メンバーだったからなのか、パンサラッサは単勝22・8倍。15頭立て

父 ロードカナロア
母 ミスペンバリー
母の父 Montjeu

鞍 種 [7-6-0-14]
サウジC ドバイターフ
距離適性 中距離
脚 質 逃げ・先行

の7番人気に甘んじていた。けれども、当時の担当、池田康宏元厩務員には自信があったという。「パンサラッサは暑さが苦手。前走の札幌記念のあとは北海道で放牧していて、季節が変わってからトレセンに帰ってきた。涼しくなると手を焼くほど元気になるのがパンサラッサ。いいタイミングだと感じていた」その思いは返し馬を終えた鞍上、吉田豊騎手も同じだった。「池田さんの言う通り、良くなってる。これなら——」この一言で「今日はやれる」と、池田厩務員の自信は、確信に変わったという。

ファンファーレが鳴り響き、3番ゲートに悠々と身を収める。近走はスタートダッシュがつかないレースが続いていた。しかし、この日のスタートは互角だった。鞍上の手が動き、パンサラッサがこの日も果敢にハナを叩く。そして向正面に差しかかったところで先頭に立った。実況が後続馬の紹介をし終えるころ、2番手との差は測れないほど広がっていた。前半1000mの通過は57秒4。ハイラップのまま大ケヤキを通過する。それでもなお、脚は止まらない。ターフビジョンと6万2000人の瞳に、1頭だけが映し出される。勢いは衰えず、そのまま4コーナーを回っていく。長い。わかっている、長い直線——。残り400m、坂を駆け上がり始めたところでムチが入る。1回、2回。間が開いて3回、4回……。しかし、ムチが入る度に後続との差が縮まっていく。長い坂を上り切ると同時に脚が止まる。見ていた私が、息継ぎを忘れていることに気づいたとき、1頭の馬がパンサラッサを交わし

てゴール板を駆け抜けた。勝ち馬の表情を捉えた画面に、息の上がるパンサラッサが一瞬だけ見切れた。目の当たりにしたファンを沸かせるだけでなく、最後の最後まで粘り強く、勝ちに行つたパンサラッサ。ゴールの10mほど前でイクイノックスに交わされて2着となつたが、この一戦でさらに多くの人々がパンサラッサの「虜」となつた。

その後は23年、英国のサセックスS(GI)への出走を予定していたところで前脚繋じん帯炎を発症してしまった。この年で引退することがすでに発表されていたこともあり、このまま引退かと予想するファンもいたが、なんとパンサラッサは帰つてきた。復帰、そして、引退レースとなつたのが同年のジャパンC。私は「ありがとう」と、何度も何度も唱えながら最後の直線を見つめていた。

ジャパンCの夜、矢作調教師とお会いする機会があつた。私は矢作調教師に「パンサラッサと先生にたくさんのお話を与えてもらいました」と感謝の言葉を述べたが、矢作調教師は首を横に振つた。「それは違う。僕らが与えてもらつているんだよ、みんなに」と。

年が明けた24年1月8日。パンサラッサの栄光を称え、中山競馬場で引退式が催された。光栄なことに私も出席させていただくことになり、式が始まるまでの時間を控室で過ごしていた。同じく出席する元厩務員の池田氏と、パンサラッサの生産者である木村秀則氏は、その日が初対面。二人の会話は、実に興味深かつた。「パンくんはやはり生まれた時から、やん

「ちゃ」だったのですか？」という池田氏の問いに、木村氏は「牧場では優等生でしたよ。他馬の争いごとには関知せず、おとなしくて、いつも淡々としていました」と答えた。両者とも「信じられない」といった具合で笑い合う。「どのタイミングで変わったのか?」「だから海外遠征の際は落ち着いていたのだろうか?」と、正解の出ない答え合わせは、いつまでも続いた。

夕焼けと入れ替わるように、パンサラッサがターフに姿を現した。レースだと思っていたからか、いつも以上に「やんちゃ」なパンサラッサだった。パンサラッサに歌を贈るため、壇上にのぼった。私はそこから、光る瞳を見た。雨上がりの水たまりのようなその瞳は、どんな言葉も奪い去るほど眩しかった。それはパンサラッサの瞳ではない。パンサラッサを送る、競馬フアンの瞳だった。

競走馬の栄光を語るとき、負けたレースにスポットを当てるのは無礼なのかもしれない。あの日、パンサラッサは確かに負けた。けれども、記憶に残る、勝ちに等しいと言える走りだった。パンサラッサを語らずして、22年の天皇賞・秋を語ることはできないだろう。「一度くらい勝つのでは?」私はそんなことを考えながら、何度もレースを見返している。

—— 行け、パンサラッサ。世界を作るのは、君だけ。

(ブルーノ・ユウキ)

イクイノックス

三冠牝馬すら寄せ付けない衝撃の歴代最強馬

青鹿毛

牡

2019年生まれ

昭和50年代から競馬を見続けて半世紀近くが経った。この間、衝撃を受けたレースと馬を三つ挙げてみたい。

一つはサイレンススズカの毎日王冠。馬体重452キロの小柄な馬が、直線の長い東京コースでハナを切ると、上がり35秒1の脚で5連勝中のエルコンドルパサーを2馬身半チギったレースである。次走で競走中止となり天に召されたが、1カ月後にエルコンドルパサーがジャパンCで魅せた末脚をみると、「無事だったら…」と思わずにはいられなかった。

次はディープリンパクトの皐月賞。スタートで出遅れるも終わってみれば2着以下を2馬身半チギる圧勝劇。「なんじゃこの馬は!」と、それまでにない衝撃を覚えた。GIを7勝した名馬は、馬名通り深い衝撃を与えてくれた。

最後はイクイノックスが3歳時に走った天皇賞・秋。スタートから逃げたパンサラッサを10番手から差し切った末脚は、長年競馬を見てきた中でも目にしたことのない内容だった。

1頭だけ別次元の末脚。グレード制導入後、4頭目となる3歳馬の制覇は、レース史上もっとも少ないキャリア5戦での栄光。この先どんな競馬を見せてくれるのか、と期待で胸が

父 キタサンブラック
母 シャトーブランシュ
母の父 キングヘイロー

成績 [8-2-0-0]
天皇賞・秋2勝 有馬記念 宝塚記念
ジャパンC ドバイシーマC

距離適性 中距離
脚質 先行

膨らんだ。

同馬はローテーションも異例だった。2戦目の東京スポーツ杯2歳Sを圧勝すると、半年ほどレースに出走せず皐月賞へ挑んだ。年明け初戦が皐月賞だった馬はコントレイルなど数頭目にしてきたが、半年ぶりというローテで大外枠から2着を確保。続く日本ダービーではドウデュースにクビ差の2着。クラシックは惜敗続きで勝てなかったものの、3歳秋以降の6戦では毎回のようには衝撃を与えてくれた。

3歳馬として史上5頭目の天皇賞馬となったイクイノックスは次走で有馬記念も勝った。キャリア6戦でのグランプリ制覇は史上最短。この2レースが評価され、年度代表馬に選出された。

4歳春にドバイシーマクラシックに出走、従来のレコードを1秒も縮めてGI3連勝を遂げると、帰国後は宝塚記念に駒を進めた。圧倒的1番人気に支持されたが、このレースは波乱含みにみえた。初の阪神コースで斤量58キロと初物づくしであり、GI7勝を果たした父キタサンブラックも宝塚記念は9着と凡走している。父も4連勝をしたことなどなく、イクイノックスにとって大きな壁だと感じてしまった。

その懸念通り、2着に惜敗したダービーと同じく最後方からのレース展開に。4コーナーでも外を回らされ、「なんと、負けたか!」と感じた直後、直線で脚を伸ばすと前をまとめて

交わしGI4連勝を果たした。

次走で秋の天皇賞を制したこの馬の勝ち時計は1分55秒2。先行勢が総崩れする中、別次元の末脚を見せてのレコード勝利。トーセンジョーダンが持っていた従来のレコードを0秒9も更新。この記録は芝2000mでの世界レコードとされている。

ラストランのジャパンCでは、三冠牝馬のリバティアイランドと初対決となった。

このレースではリバティアイランドが優勢だと感じてならなかった。同コース同距離のオークスでは2着を6馬身チギってみせた。同じ三冠牝馬のジェンティルドナとアーモンドアイはオークスを2分23秒台で勝ったが、この馬の勝ち時計は2頭をコンマ5秒以上も上回っている。

牝馬と牝馬の三冠馬対決は過去に2回あった。2回ともジャパンカップであり、ジェンティルドナはオルフェーヴルに、アーモンドアイはコントレイルに先着。いずれも牝馬三冠馬が牝馬三冠馬を破っている。特にジェンティルドナはオルフェーヴルとの4キロ差を活かし、マッチレースに持ち込むとハナ差で先着した。加えて近年は牝馬が強い時代でもある。レース前はリバティアイランドが優位に思えてならなかった。

しかし、イクイノックスの脚は別次元で、4キロ差の三冠牝馬を4馬身もチギってしまった。しかも、このレースで3着だったスターズオンアース、4着だったドウデュース、5着

だったタイトルホルダーは、次走の有馬記念で揃って上位を占めている。

このことは、ジャパンCのレースレベルを証明するものだろう。

数多くのレースを目にしてきたが、このジャパンCのゴール直後は口がポカンと開いたままだった。シンボリルドルフ、テイエムオペラオー、ディープリンパクト、ウオッカ、ジェンテイルドンナ、キタサンブラック、アーモンドアイとGI7勝以上の名馬がいずれも勝利してきたジャパンCで、言葉が出ないほどの衝撃を受けてしまった。

ここからは夢想の話だが、前記したGI7勝以上馬が同じレースを走っても、イクイノックスに勝てる馬はいない気がする。


3番手を追走して2分21秒8、加えて上がりタイムは33秒5。ディープリンパクトが勝った06年と上がりタイムは同じだが、同馬は11番手からの差し切りであり、3番手から先行して同じ上がりマークしている。

GI勝利数ではアーモンドアイやディープリンパクトらに届かなかったが、GI6連勝を果たしたのはテイエムオペラオー、ロードカナロアに次いで史上3頭目。無敗でGIのみ6連勝を遂げたのは日本競馬史上唯一の大記録となった。

引退後の種付け料は2000万円。アーモンドアイとの配合も決まった。3年後の夏、2頭の仔はどんな走りを見せてくれるのだろうか。

(小川隆行)





2023年 第43回
ジャパンカップ
優勝 イクイノックス

三冠牝馬もダービー馬も撃破。

そして世界最強馬は伝説へ。

名馬が揃った超ハイレベルなジャパンCを好位から圧倒したイクイノックス。
前年から続く連勝を6に伸ばす堂々たる競馬で引退レースを飾った。

ドウデュース

夢に照らされる、競馬の「主人公」

2019年生まれ

牡

鹿毛

2024年の宝塚記念。ドウデュースは、史上最多票でファン投票1位となった。彼の馬柱はきれいとは言えず、掲示板外の敗北は何度もある。にもかかわらず何故これほど人気を集めるのか、疑問を覚える人もいるだろう。だが、それは逆だ。この馬柱は彼が立ち上がった回数を証明しているのだ。その一筋縄でいかない道程と、肝心なところで勝つドラマティックさ。キャラクター、取り巻く馬や、人々。さながら少年漫画の主人公だ、と心底思う。

ドウデュースは、ひとことと言えば快男子。首を振ってブイブイ歩き、いなく。大食漢で、すぐお腹がすいてしまうのか、いかなる状況でも、食べ物らしきものはパクついてみる。必然太ってしまうが、太りやすさは内臓の強さの裏返しである。さらに牝馬が大好きで、見かけると寄って行き…挙げればキリがないが、カラリとした男子を想起させる。

彼の「肝心なところで勝つドラマティックさ」が最初に発揮されたのは、朝日杯FSだ。主戦の武豊騎手は当時、平地でのGI完全制覇までホープフルSと朝日杯FSを残すのみという状況であった。新しいGIであるホープフルSはともかく、朝日杯FSは21回挑戦して未勝利。「武豊は朝日杯FSを勝てない」というジンクスすら囁かれた。しかしドウデュース

父 ハーツクライ
母 ダストアンドダイヤモンドズ
母の父 Vindication

成績 [6-1-1-6]
朝日杯FS 日本ダービー 有馬記念
距離適性 マイル～中距離
脚質 差し

スはジnkクスを跳ね返し、マイルの舞台で後のGI馬、セリフォスとダノンスコーピオンを下して、鞍上に22度目の正直の勝利を運んだのである。

22年にクラシックを迎えた世代は、史上最強世代との呼び声も高い。クラシック初戦の皐月賞でドウデュースは3着と敗れたが、ひとときわ素晴らしいライバルと邂逅する。2着のイクイノックスである。天才肌だが、繊細で食事も少なく、疲れやすい体質。そしてスラリとした馬体。無駄なことはないクールな男だ。ドウデュースとはすべてが対比的で、まるで少年漫画のライバルであった。2頭は戦いの舞台を日本ダービーに移した。

ダービー当日は暑いほどの快晴だった。3年ぶりにスタンドを埋めつくした大観衆が見守る最後の直線、後方からしびれるような手ごたえで先頭に立ったのはドウデュース。イクイノックスもそれを追い鋭く伸びるが2着まで。ドウデュースは振り切った。またもダービーという肝心な舞台で勝って見せた。立ち尽くしてしまふほど喜んだのが、オーナー・松島正昭氏だった。「武豊で凱旋門賞を勝ちたい」と馬主をはじめたことで知られる松島氏。ドウデュースが凱旋門賞を目指すのは必然だった。年内は国内を選択したイクイノックスとは道が分かれ、ドウデュースは一足先に世界へ打って出た。

しかし、ここからが苦難の連続である。フランスでは前哨戦で負け、本番の凱旋門賞も惨敗してしまった。帰国後の京都記念こそ勝利したが、ドバイターフは跛行による取り消し。

23年、4歳の天皇賞・秋では——なんと、当日に武騎手がほかでもない松島オーナーゆかりの馬に蹴られ負傷してしまう。パートナーを欠いたまま、ダービー以降無敗で「世界王者」の称号を手にしていたライバルと、再びまみえることになった。

イクイノックスがゴールしたとき、ドウデュースは10馬身も後方にいただろうか。道中も未経験の3頭併せで先行し、本来の形を見せぬまま7着。友道康夫調教師も、本来の実力ではないと歯噛みした。続くジャパンCの前には、イクイノックスが引退を表明。2頭が一緒に出走できる最後の機会だったが、武騎手の復帰は叶わなかった。ドウデュースは4着に終わり、イクイノックスは完璧な勝利で花道を飾って、種牡馬となった。

ライバルのいないターフで、ドウデュースはただ1頭古馬三冠を走りぬくことに決まる。そのタフな道のりに対し、彼の身体は活気に満ちあふれていた。鞍上は待ち望んだ、武騎手である。ゲートを飛び出すと、ドウデュースは俺は行けるぞとばかりに前掛かるが、鞍上は本来の形——後方でじつくりと構える形で、彼と折り合った。そして残り1000mというところでいつの間にか外に持ち出すと、大外からグングンと位置をあげていく。4コーナーでは内側の馬をおおるような鋭いコーナーリング。武騎手の「GO!」を聞いて、ドウデュースは本当に嬉しそうにハミを取ったという。直線、粘るタイトルホルダーをとらえ、猛追するスターズオンアースも寄せ付けない。ドウデュースと武騎手は、長いトンネルを抜け、完

全に復活したのだった。

そこにいないイクイノックスの強さをも証明し、種牡馬という道へ一足先に向かうライバルへの餞はなむけとしたドウデュース。思い返せば、3歳春ではイクイノックス本格化前、4歳秋ではドウデュースの主戦の不在——。結局十全と言える戦いは叶わなかった。しかしこの有馬記念で、ドウデュースは、幻のイクイノックスの黒い風を感じていたかもしれない。彼らは、自らの強さで互いの強さを讃え合い続けた、漫画でもそうない、美しい関係だった。

主人公の持つ、一番の資質。それは他者の想いを背負うことで輝くことだと私は思う。武騎手は、ドウデュースをリハビリの心の支えにしていた。この馬と走るため有馬記念を目標に復帰をしたのだ。自身も多くの人の想いを背負っている武騎手だが、その想いをさらにドウデュースは背負っている。

有馬記念のドウデュースのジョッキーカーメラには、ずいぶん長く、レース後の映像が収録されている。鞍を外して、陣営とこの馬のことをほめちぎると、武騎手が言う。「もう1回行こう、フランスに行こう」と。そこで映像は途切れる。武騎手、友道調教師たち陣営の想い。オーナーの想い。われわれ、ファンの想い。ここまでの映像を残したJRAの想いすら——。ドウデュースはすべてを背負って輝く主人公だ。これからどんな結果が待ち受けようと大丈夫。ドウデュースには、物語の道程にすぎないのだから。

(緑川あさね)

ミツクフアエア

期待を背にひた走る、22年ぶりの南関三冠馬

鹿毛

2020年生まれ

羽田盃、東京ダービー、ジャパンダートダービー、南関東三冠戦の最終年となった2023年、歴代2頭目の三冠馬となったミツクフアエア。01年のトーシンブリザード以来22年ぶりの栄誉に輝いた同馬は、母のマリアージュがJRAのダートで4勝を挙げたこともあり、1歳時のサマーセールでは1500万円ほどと思われていたが、声がかからず取引価格550万円で落札された。

後にジャパンダートダービーで、落札価格2億2000万円のユティタムを筆頭に錚々たる名馬を倒し、現在の獲得賞金は1億8650万円。馬主さんの慧眼たるや恐るべしだ。

1歳当時の馬体は400キロほどで体高も幅もなく小さかったが、2歳になると成長が目覚ましくデビュー時は496キロ。新馬戦と2戦目で2着を5馬身チギってみせた。2戦目はソエを気にしておりパドックでも入れ込んでいたが、大井1600mでは破格の1分40秒7。つづくひばり特別も制し3連勝の直後、爪が割れて血が吹く状態になり、5カ月後の羽田盃にはぶっつけ本番で挑むことに。さすがに状態が懸念されたが、終わってみると1番人氣のヒーローコールを6馬身離す圧勝劇であった。ハイペースを2番手で走り後半3ハロン

父 シニスターミニスター
母 マリアージュ
母の父 ブライアンズタイム

成績 [7-0-0-3]
ジャパンダートダービー
距離適性 中距離
脚質 先行

はメンバー中トップの37秒2をマーク。スピードが長続きする強靱な心肺機能を武器に一冠目を制覇した。

6月の東京ダービーも勝って無傷の5連勝。04年アジュデイミツオー以来となる19年ぶり無敗の東京ダービー馬となった。

1カ月後の7月、ジャパンダートダービーでJRA勢と初対決。日本全国のダービー馬が集結するダート3歳ナンバー1決定戦は99年に新設され、ゴールドアリュールやカネヒキリ、クリソベリルなど24回中18回でJRA所属馬が勝っている中、ミックファイアはキリンジ以下を2馬身半離し三冠馬となった。超ハイペースの消耗戦となり向正面では外を回りながらJRA勢を突き離す余裕の勝利。同世代のダートホースではトップクラスの脚を見せてくれた。

2024年以降、大井競馬を舞台に、羽田盃と東京ダービーがJRA勢も出走する3歳ダート三冠となる。その初年度となった24年はJRA勢がワンツーフイニッシュを決めたが、仮に前年から開放されていたとしても、ミックファイアは無傷の3連勝を決めていたと感ぜさせる。その証がジャパンダートダービーの結果だった。

ちなみにこのレースを大井所属馬が制したのはオリオンザサンクス以来24年ぶり2頭目である。

秋初戦は長距離輸送を経験させるため盛岡のダービーグランプリに出走、勝って7連勝を決めた。しかし初の輸送で馬体重が30キロ近く減ったため、JBCクラシックを回避して東京大賞典に出走。JRAの古馬勢と初対決を迎えた。

競馬とは勝つたびにクラスが昇格することで相手が強くなる。相手は前年の東京大賞典を制し、ドバイワールドCを勝って世界一のダートホースとなったウシユバテソーロを筆頭に、ノットウルノやキングズロードなど強豪揃い。7戦無敗のミックファイアだがウシユバテソーロから2秒遅れての8着に敗れた。ダート戦は芝よりも古馬が優勢とされる。地方の雄は最初の壁にブチ当たった。

同馬は2カ月後にフェブラリースに出走。後方から直線で脚を伸ばしたが、勝ったペプチドナイルから4馬身差の7着だった。前述どおりこの馬は輸送に弱く、東京競馬場でのフェブラリースの際も馬運車に入るとダービーグランプリでの輸送を思い出したのか入れ込み、車内では汗だらけになったという。

3カ月後に船橋のかしわ記念に出走も5着に終わったが、フェブラリースともども地方馬&4歳勢では最先着。勝ち馬がともに2歳年上だったのをみる限り、ミックファイアが精神的に成長すれば勝利まであり得ると感じられる結果であった。

普段はおとなしく、馬房では食べるか寝るかのどちらかで、無駄なことはしないタイプの

ミックファイアだが、一度馬房の外に出ると周りを気にして暴れたり、普段とは異なる状況になると「無駄なことかしらない」と、この馬を管理する渡辺和雄師は語る。

愛馬の7連勝を見続けてきた同師がもっとも嬉しかったのはジャパンダートダービーだった。

「1戦目（羽田盃）や2戦目（東京ダービー）と異なり、このレースはJRAの強豪が揃い、ハードルは一気に高くなりました。レース展開も1コーナーで思った位置が取れず……。3〜4コーナーでも武豊さんの馬がセーフティリードに見えましたが、跳ね返してくれたので余計にうれしく、初めてうれし泣きをしました」と語る。

渡辺師にとっても、JRA勢を破って日本一になるのが最大の目標である。ミックファイアがどう成長できればベストかを尋ねると、

「今はプロ野球に入った高校生が壁にぶち当たっているのと同じ状況で、必要なのは精神的な成長です。まずは同馬の体重を500〜510キロほどに成長させたい」

と語ってくれた。馬体重が増えて精神的に成長できたら、古馬のJRA勢を倒すことも夢ではなくなるだろう。

「JRAのファンファーレを聞いてゾクゾクしたい」との言葉を聞いた私も、夢の舞台上で先頭ゴールするシーンを夢見ている。

（小川隆行）

リバティアイランド

一体どれほど強いのか、完全無欠の三冠牝馬

鹿毛

牝

2020年生まれ

2022年7月30日に新潟で行われた新馬戦はちよつとした驚きだった。レースを中団後方から進め、最終コーナーを回った時点で7番手につけていた1頭の牝馬は、ラスト600mを過ぎて追い出されると、一気の加速で前を行く6頭を飲み込んだ。結果は、2着に3馬身差をつける楽勝劇。最後は鞍上が抑え加減でありながら、上がり3ハロンはJRA史上最速に並ぶ31秒4を記録した。

この記録にどれほど価値があるかといえば、これまでにラスト3ハロンで同タイムを掲示したのは同じ新潟で行われる直線1000m戦のみで、いずれも古馬によるものだ。それを2歳牝馬が楽々と記録したのだから、とんでもない馬が現れたと思わずにはいられなかった。牝馬の名はリバティアイランド。父ドゥラメンテは皐月賞と日本ダービーを制した名馬で、タイトルホルダーやスターズオンアースといったクラシックホースをはじめ、重賞ウイナーを輩出している名種牡馬だ。所属する中内田充正厩舎と川田将雅騎手のタッグは近年競馬界を席卷しており、まさに近代競馬のトレンドが詰め込まれた1頭と言っても過言でない。

リバティアイランドの2戦目は、GIIIアルテミスS。単勝1・4倍の大本命に押される中、

父 ドゥラメンテ
母 ヤンキーローズ
母の父 All American

成績 [5-2-1-0]
阪神JF 桜花賞 オークス 秋華賞
距離適性 短～中距離
脚質 先行・差し

新馬戦同様に中団後方を進むリバティアイランドだったが、最後の直線で進路を失ってしまふ。鞍上の川田騎手も外へと持ち出し、先に抜け出したラヴェルを懸命に追いかけるもクビ差届かず。負けるはずがないと思われた一戦で、まさかの2着に敗れた。

自身の価値を証明するためにも勝つしかない。そんな不転の決意で挑んだのが、世代のトップランナーたちが集うGI阪神JFだった。前走の敗戦を生かして中団やや外めをエスコートした川田騎手は、スムーズに進路を確保すると追い出しのタイミングを見計らう。ゴースインを受けたリバティアイランドは追走を開始すると、前を行くライバルたちを一気に飲み込んでいく。ラスト200mで先頭に立つと、2着に2馬身半の差をつけて1着でゴールを駆け抜けた。

明け3歳になり、2歳女王のプライドとともに挑んだクラシック一冠目の桜花賞。この年の阪神競馬場は後ろが伸びない先行有利の馬場傾向にあり、例年にも増してポジシヨニングが重要となっていた。

注目が集まったスタートでリバティアイランドは後手を踏み、後方3、4番手の位置取り。最悪の展開に場内からもどよめき上がる。最後の直線では2番手から先頭に立ったコナコーストを4番手からペリファアニアが追い詰める。前残りの決着かと思われたゴール直前。リバティアイランドはただ1頭、大外から前に迫ると、2頭を一瞬のうちに差し切ってしまう

った。常識を超えた異次元の末脚で桜花賞を制したりバティアイランドは、クラシック二冠をかけてGIオークスへと駒を進める。

オークス当日、私はリバティアイランドの勇姿を見届けるために東京競馬場へと足を運んだ。切れすぎる末脚から距離不安もささやかれたが、堂々の単勝1.4倍の支持を受け、スタートの瞬間を迎えた。心配されたスタートを決めると、6番手の内を追走。縦長となって迎えた最後の直線。馬場の真ん中に持ち出し、持ったまま2番手に上がると満を持して川田騎手がゴーサインを送る。その刹那、リバティアイランドは一気に加速し、粘るラヴェルを交わして先頭に立つと、あとは後続を引き離していく一方。最後は2着に6馬身の差をつけて檜の栄冠に輝いた。

現地でカメラを片手に観戦している中、ラヴェルを交わしたあたりでリバティアイランドの姿をファインダーから一瞬見失ってしまった。慌ててカメラを前に移したが、次にその姿を捉えた時、彼女は想像の遙か前を走っていた。あまりの加速力に鳥肌が立ちながらシャッターを切ったことを今でも覚えている。この一戦を目の当たりにできたことは一人の競馬ファンとして、かけがえない財産であり幸運だったように思う。

無事に秋を迎え、挑んだ三冠最後のGI秋華賞。三冠が確実視される中、4コーナーを回って早々に先頭に立ったリバティアイランドを、ただ1頭ローズを日本レコードで制した

マスクトデーヴァが追い詰める。徐々に差が詰まるも、1馬身差に迫ったところがゴール。リバティアイランドは、史上7頭目の三冠牝馬の快挙を達成した。

こうなると次の興味は一体どれほど強いのかという点に移るが、その力を測る相手が当時の日本競馬界には存在した。世界最強の呼び声高い1世代上のイクイノックスだ。秋華賞の後、リバティアイランドはイクイノックスも名を連ねるGIジャパンCへの出走が決まった。思えば、リバティアイランドにとってはこれが挑戦者として挑む初めてのレースだったかもしれない。レースはパンサラッサが1000mを57秒6と飛ばして大きく後続を引き離す中、イクイノックスをマークするように直後の4番手を追走。直線では、遠く離れたパンサラッサを目掛けて加速するイクイノックスに対して、リバティアイランドにはいつもの伸びが見られない。最後はイクイノックスに4馬身離される、生涯初の完敗といえる敗戦を喫した。ただ、1世代上の二冠牝馬スターズオンアースやダービー馬ドウデュースは抑えきって2着を確保していたことから、さらなる飛躍が期待された。

そして24年、古馬初戦のGIドバイシーマクラシックで追い込み届かず3着に敗れると、帰国後、右前脚の軽度な種子骨靭帯の炎症により休養へ。

一体どれほど強いのか。この問いに対する答えは現時点では出ていない。しかし、再びターフに戻ってきたときに、あの豪脚とともにその答えを示してくれるに違いない。(安藤康之)



クセの強い奴ほど愛される

「無くて七癖、有って四十八癖」ということわざがある。人は多かれ少なかれ、生きていく過程で誰もが「癖」を身に纏う。他人の癖は、周りから見ていると、不思議で、滑稽で、時にはイライラさせられることも多い。ただ、周囲に迷惑や不快感を与える悪癖を除けば、人間味のある個性として容認しつつ、付き合っていくのが私たちの世界である。

生まれた時から厳格に育成され、調教されてデビューする優等生な馬たちにも「癖」はつきもの。毎日の生活習慣から生まれる変な癖もあれば、速く走るために身についた悪い癖もある。人の癖と違うところは、変な癖も悪い癖もその馬の楽しい個性となり、「クセ馬」という名称で愛されることだ。それらを、メディアを通じての紹介や、SNSを通じて知ることになれば、その馬に親近感が湧きファンが激増していく。その馬が競馬場から去っても、いつまでも語られ続けるのは、熾烈な戦いの中で「和みの記憶」を残してくれたからだろう。馬の世界では、不思議なことにクセの強い奴ほど誰からも愛される…。

クセ馬と言っても、様々な連中がいる。古くはオグリキャップの武者震い。ゲートに入る時にブルッと武者震いをする癖のあったオグリキャップが、成績不振とともに武者震いを止

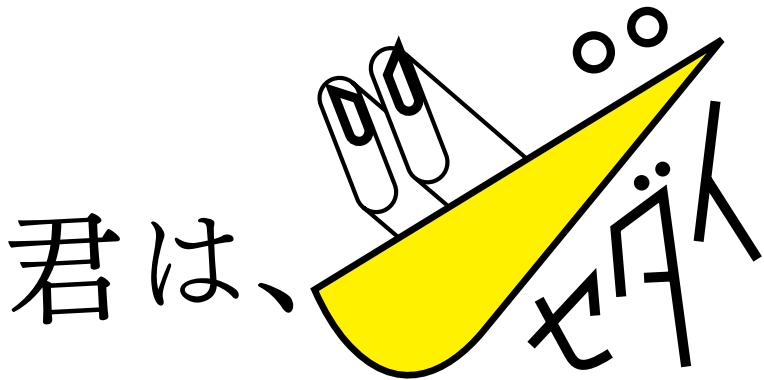
めた。ところが、引退レースの有馬記念のゲート入り前、ターフビジョンに映し出されたオグリキャップが武者震いをして、場内から大歓声が上がった。そして彼が見せた感動的なラストランは、オグリキャップの武者震い癖とともに、長く語られるエピソードとなっている。

レース以外で観客を盛り上げた不思議なクセ馬たちも、多くのファンに愛されている。本馬場入場を一大イベントに仕立てた稀代のクセ馬、ハクサンムーンもファンの多い馬だった。2015年スプリングターズの本馬場入場。最後に入場してきたハクサンムーンに、スタンドの誰もが注目する。酒井学騎手を背にターフビジョンに映された時、ハクサンムーンの左旋回ショーが始まる。クルクルと旋回するハクサンムーンに送られる声援の大きさ。心行くまで旋回したハクサンムーンが返し馬に入ると、場内からの大拍手でイベントが終わる。「ハクサンムーンの本馬場旋回」は、クセ馬推したちの中で「伝説」と化している。

いつの時代にも名馬がいて、感動のレースシーンがある。そして並走したクセ馬たちが、更にそのレースを盛り上げる。たとえレースを勝つことができなくても、レースの思い出に組み込まれると、間違いなく主人公になっていくクセ馬たち。

ゴールドシップ、エイシンヒカリ、リフレイム、メイケイエール…などなど。愛されるクセ馬たちは、いつまでも記憶の中を駆けている。

(夏目伊知郎)



君は、ゼダイ人 何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!